



無事に大般若理趣文

住持にお手

伝

い頂

また併せて、

檀信徒合

えた委員長が中心とな

縦横無尽に遺憾な

は専門知識と経験を備れ、また建設委員会で

員会も円滑に運営さ

源院本堂復興再建委

わ

くその手腕を発揮され



2011年 (平成23年) 3月11日に発生した東北地方 太平洋沖地震とそれに伴って発生した津波、およ びその後の余震により引き起こされた大規模地震 災害で、当院も津波の災害こそは免れましたが、 震度6強の本震と、それに続く余震によって多大 な被害を被りました。

特に盛り土である参道両側法面の膨らみと埋設 されていた上下水道管の損壊。庫裏の裏山の崖 崩。そして最も甚大だった本堂の屋根と梁の被害 に見舞われました。

桃源院檀信徒一同は、時到り、護持会役員を充 て、本堂復興再建委員会として、また建設委員会 を内部に設け、ここに250年の歴史かおる旧本 堂から、木の香かおる新本堂へと、この大事業を 完遂できました。これも、役員各位のご尽力と檀 信徒各家のご浄財とご支援の賜と感謝申し上げて おります。

> 再建復興委員会 委員長 佐々木明雄 建設委員会 委員長 大黒 勝雄

落慶法要は平成28年11月を予定)







TOUGEN NEWS 2 月 1 日 月 (発行所 桃源院 発行責任 桃源院 広報部 http://www.momo.or.jp/

曜日)

〒191-0065 日野市旭が丘1-10-4 編集 桑原賢龍 田中文高 桃源院アドレス

インドのカピラ城で

秋の午後に仮落慶法要は を秋風が揺らす、 平成二十七年十月二十 紅葉間近い梢 晴れた れました。 に大なり小なりと被災し 皆様には東日本大震災

日

(日)

たにもかかわらず、菩提 きました。 こもった浄財をご寄付頂 'の本堂復興再建に心の お陰さまで、

厳

粛に執り

行 わ

れまし

寺

東京別院の僧侶と法

類

過が巡って来ます。 (式と走馬燈のように経)の発掘調査を経て、上 感謝無尽。

募、 棟 跡 ました。 発 着工 願 から計 発見されてた遺 画 寄進勘

(写真)をお祭りいたします。お誘い併せてお参りください。 「天上天下唯我独尊」 大自然の恵みに包まれ 仏さまになれる可能性を秘めたひとりの人間として この世に生大自然の恵みに包まれ 仏さまになれる可能性を秘めたひとりの人間として この世に生大自然の恵みに包まれ 仏さまになれる可能性を秘めたひとりの人間として この世に生大自然の恵みに包まれ 仏さまになれる可能性を秘めたひとりの人間として この世に生きれいな花々の中で生まれた王子さまはすぐに六歩半進み 右手を天 左手は地を指さしっの花園で王子さま(お釈迦様)がお生まれになられました。 、ショカ(むゆうげ)という花が綺麗にさいています。赤・白・黄色(花咲き匂う帰ることになりました。帰る途中(ルンビニーという花園へ立ち寄られました。 王子様をご懐妊されました。王子さまがお生まれになる日が近づきて、マーヤさまのお腹に入った夢でした。あまりに不思議な夢の後 お妃のマーヤさまがご覧になった不思議な夢は 花咲き匂うルンビニ マーヤさまは世継 天から白い象がまい ヤさまは故 でまは世継では、



お釈迦様のバースデー(お花見がおわってしばらくして、花祭りが四月八日に行われます)

万縁脱する処 身安し

雲居希膺(うんごきよう) 【一五八二~一六五九

山。雲居は字。別号把不住軒。勅賜号慈光不昧禅師。追号大悲円満国されて松島【宮城県】瑞巌寺に入り、中興の祖となる。大梅寺を開 度し、妙心寺一宙東黙の法を嗣ぐ。若狭(福井県)小浜、摂津(大阪 臨済宗。土佐(高知県)の生まれ。大徳寺の賢国良のもとで出家得 勝尾山に住み、後水尾天皇の法問に答える。後に伊達政宗に招請

坐禅というものは非常

の姿自体が発光体であ ないし、理屈も要らな あり、疑う余地もないの これはもう確かなことで たりするものではない。 れたり、あるいは反射し り、何か別の光に照らさ である。それはその坐禅 大なる仏の光明を放つの らず知らずに、自から偉 すれば、自分も他人も知 い。ただ如法に端坐正身 もっている。説明もいら 姿自体が大いなる威力を に不思議なもので、その

きた。この子は同じ敷地 こに幼い男の子がやって して坐っておられた。そ ひとり広い道場で端然と とである。ある日、老師 を指導せられたときのこ 頃、佐賀に行って参禅者 沢木興道老師が壮年の

るや、一目散に息せき切 ている沢木老師を一目見 子だった。その子は坐っ の社宅に住む会社員の息 のである。(沢木興道 光はかくのごとく伝わる ない幼児にも、坐禅の威 た」と叫んだ。何も知ら が仏さまに成りなさっ ん、お母さん、沢木さん って走り帰り、「お父さ 「禅に生きる」参照



妙心寺 て一宙禅師の鉗鎚を受って、京都の妙心寺に入っ 居も一宙門下の高弟であ 名な愚堂和尚がいる。雲 を得た英傑のなかには有 だ。一宙に参じて禅の道 け、ついにその法を継い 雲居は土佐の生まれ



逸話が残っている。 賊にまで伝わったという られたら、その威厳が山 い出す。禅師が静かに坐 私はいま雲居禅師を思

話も残っているのであ

もに、当時衰えていた禅 り、愚堂、大愚、一絲、 風の復興に力を尽くした 万安などという俊傑とと して援助した。お陰で雲

人である。

号一九一七年発行という う。「立川文庫」二十一 れをつけたものであろ その頃の彼の足跡に尾ひ 双の武勇伝は、大部分は 飛ぶ自由なカモメじゃ 見が合わず、「遂不留江 方が有名で、塙 直之(塙牛という坊さんは俗名の じ門下に鉄牛【一五六七一宙に参じたとき、同 豆本がある。興味のある 諸方を遊歴した。豪快無 よ、と主君を見かぎって っていられない、空高く 南野水 高飛天地一閑 之は主君の加藤嘉明と意 🎮 」 こんな汚い 水に留ま 万は図書館ででも借りて ◇一六一五】がいた。鉄 「天下の浪人」となり、 団右衛門)という。直

は刀を差していたという うに思われる。僧の姿で 門の面影を残しているよ はやはり豪傑、塙団右衛 た。その鉄牛という名前 修行を通して相当深いと 托鉢をしていても、腰に とろまで到った人であっ 入り、一宙に参じ、禅の 読んで頂きたい。 彼は世を捨てて仏門に

学金を出すような如くに 親身になって励まし、奨 鉄牛は、青年僧雲居を

家康の耳に入り、家康が

この件は、ついに徳川

りとも、義の存するとこ た。「たとえ出家の身な じきじきに裁定を下し

ろは、さもありなん。塙

その甲斐あって。、雲居 居は諸国を巡り多くの修 大愚、一絲、万安などとは、当時の俊傑、愚堂、 行を積むことができた。

な修羅の戦場じゃない

ることも出来たのであ 親しく交って切磋琢磨す (一六一四年)、豊臣と ところが慶長十九年

出を頑として許さなかっ た。ところが塙団右衛門 生死を共にしようと言っ が出来、そこで、貴公と 阪城にたどり着いた。や を通して、街道を急ぎ大 もいられずに雲居は昼夜 耳にした。居ても立って 居はこれを行脚の旅路で将になったのである。雲 う豪傑に伍して一方の大 村、後藤又兵衛などとい 阪城に入った。真田幸 っと
と
さ
塙
に
会
え
る
こ
と

た。お前の行く道はこん 牛は再び僧侶から武士 徳川とが断絶すると、鉄 (塙団右衛門) に戻り大 (鉄牛) は。雲居の申し づけた。

は再び飄然として旅をつ た。三十三歳の頃だ。彼 を探し当てて厚く葬っ 遺骸を探し、ついにこれ れて行った。雲居は戦場 陣となり、元和元年(一 た。雲居はまだ若かっ 面々もことごとく戦に倒 六一五年)大阪は落城 に潜入して戦死した塙の し、秀頼も淀君も勇士の 冬の陣につづいて夏の

ためであった。 るが、実は雲居を捕える 塙団右衛門をかくまった のだ。その理由は一宙が 川方に捕えられたという き、それに雲居は愕然と の途中で妙な噂さを聞 ことがあるというのであ した。師の一宙和尚が徳 しばらくして、その旅

程の気概があった。 と一宙和尚の釈放を主張 調べに屈せず、身の潔白 ていた。彼は過酷な取り た。その頃には雲居はす 定、雲居は自首して出 見たからである。案の ず雲居が出頭してくると でに相当深く禅の道を得 信念たるや天地を動かす してやまなかった。その 一宙を捕らえたら、必

早晚、其一世、五八年 己以愚麗一時路了 其上摩訶行、禅世 八柱輪吧/月 绿 長有,成"子"了 食里。王二十八八 馬下好ブ 遠るれにハクナヤマ 教主 立、リエノメレラ 散生八十二佛丁山 水っ雄しラ水丁ク 水小水一切丁月 生不來佛 坐禪私質 水中 ~ ~ サイナリ

以来の禅風を大いに挙揚建立され、彼は関山国師 罰すべきにあらず……」 浜で雲居のためにお寺が に出たが、若狭の国、小 つとめあげた後、また旅 座となった。 心寺に帰り、妙心寺第一 とともに許されて再び妙 はある。雲居は師の一宙 さすがに家康だけのこと 雲居は妙心寺の首座を

のひさし》

そ言っておる。それを耳 あざやかに書いてあっ て見ると、次の偈が墨痕 ぬけのからの方丈に入っ たものである。人々がも まった。実にあっさりし っさと寺を出て行ってし にした雲居は、ある夜さ 不平らしいことをぼそぼ い俗人や坊さんが何やら した。ところが嫉妬ぶか

行李 三毒

息をひきとるに際し、わ ど無念だったと見えて、 居は政宗公の拝承を固辞 尚を名刹、松島の瑞巌寺 うほどの礼を尽して、和 うこれ以上はできぬとい ぞっこん惚れ込んだ。も の雄、伊達政宗が雲居に 出てくるのである。奥州 が子忠宗に向って、和尚 寛永十三年、七十二歳で した。政宗はそれがよほ を瑞巌寺に引っぱってく に招いたのであるが、雲 そしてまた豪傑の名が

三毒生ずる時、双眼暗し 鞋底笠檐、天地広し 衲僧の行李、人知るや 万縁脱する処、一身安し

の遺骸を葬ったことで、

ならぬ。褒めこそすれ、 徳川に敵意ある証拠とは

鞋底笠檐《草鞋の底、 《竹で編んだ籠(旅 (おろか) 》 (妬む、怒る、 (むさぼる) 愚痴る) 笠

山、摂津の勝尾山等で大衆も参集し、伊予の松 雲居を召して、親しく禅 の笠、一本の杖だけの雲 さずにはおかない。一つ だから、やはり人を照ら の教えを請うたりもし た。また、後水尾上皇も 水姿であるが、僧侶も大 禅のすがた自体が発光体 いに教化の成果をあげ いくら隠れてもその坐

の焼ける臭いが流れてい 焚き火からは何やら獣肉 ひげぼうぼうの山賊だ。 の前に立ちはだかった。 ていたのだ。たちまち三 が森のなかで焚き火をし ではなくて、三人の盗賊 と、雲居は火の見える方 いて見ると、それは人家 向に歩いて行った。近づ 方が寝心地がよかろう 人の荒くれ男が雲居老師

リのところでの修行に打 しかし、生死のギリギ

破れ笠に一本の杖、乞食 き、和尚はもう奥州目指 ると和尚は気が早かっ まがいの托鉢しながらの を出そうとしていると た。仙台では鄭重な迎え たてにふった。行くとな 願で、ついに雲居が首を た。父子二代にわたる懇 に特使がさしむけられ して出かけていたのだ。

と歩をゆるめた。ふと見 夜を明かすのなら野中の る。どうせこの辺りで一 れば遠くの方に火が見え 尚は寝る場所を探そうか 困ったには困ったが野宿 道がわからなくなった。 中で、日が暮れて和尚は り一面茫々たる荒野の途 差し掛かっていた。あた するのは日常のこと、和 一軒屋にでも宿を借りた さて旅程はもう奥州に

おいてゆけ」 山賊の一人にわたした。 かけた革袋をはずして、 全部じゃ……」 こう言って老師は首に 「かねか、わしは平素

開き、 こう言いながら革袋を 焚き火のあかりに

更あんな乞食坊主の一人

る仕事はお前に托する

やがて伊達家から雲居

かった。 ある雲居はびくともしな ち込んできた真の禅者で 「ほほう、お前たちは

の坊主ありがねそっくり なかなか強そうじゃな をわしは初めて見たよ。 山賊か。山賊というもの 「なにをぬかすか、こ

ないが、これがありがね がよいぞ、いくらか知ら とにある、きさまらは運 台からもろうたものがこ かねは一文ももたぬが… …。おう、そうじゃ、仙

やつではなかろうか。も 者もないほど不気味なと のあたりはめったに通る しやたぬき、狸の化けた ころだに。 あの坊主、も

「きたない袋だな、坊

賊は驚いて肝をつぶし ぴか光っているのだ。山 判が百両、夜目にもぴか かざして見るとなんと小

みの方かい_ 「さあこんどは身ぐる

もならんわ。」 れよれの破れ衣は一文に いい坊主だな、おい坊さ ん、着物の方はかんべん してやらあな。そんなよ 「おそろしく気まえの

> ただの木の葉か。ちやり 両の小判、夜が明けたら

し狸なら、

いま奪った百

ん、ちやりんと、これこ

た。 め、それを敷いて坐っ 雲居はこう言って、すこは脱がずにおくぞ。」 し離れたところで草を集 「ああそうか、では着物

> あの坊主を見ろよ、坐っ 情けなや。それにしても 小判の正体が木の葉とは の通りいい音を出すこの

たあの恰好をよ。

どぶろくをあおったが、

獣肉をむさばり食らい

少しも酔いがまわらな

妙にシーンとした気持で

い。そのうち山賊の一人

が言い出した。

「おいおい、あの坊さん

を観ずる莫れ、この大宇 莫観是非・・・是非善悪然として不動である。 て、山の聳ゆるが如く泰 唸る。 和尚は結跏趺坐し木ぶつかって、 ごうっと 荒野に風がすさび、森の である。茫々たる奥州の ればこれぞ仏威儀の坐禅 息だが、雲居大和尚が坐 凡夫が坐ればただの休

> の仏さまを見たことがあ ときに、あれとそっくり 昔、お寺にしのび込んだ たいじゃねえか。おれは はまるで ほとけさんみ

坊主、妙なやつだな。と ろで独坐している。あの うせるかと思った乞食坊 つになって禅定に入るの 宙の大生命とぴったり 主が、近くの見えるとこ ほうほうのていで逃げ よ、坊主をよく見な。な しくなってきた」 ようだぜ」 にやら後光がさしている 「あれっ、びっくりさせ 「おれも見たことがある

ゃねえか。なんでえ、今 獄にゆくに決っているじ だんだん、なにやら恐ろ るなよ、おれは、もう、 て来たからよ、おいら地 「わるいことばっかりし



て荒かせぎができるかっ や二人、それが恐ろしく

ると、おれはガキのと ねえ、あの坊主を見てお ざん苦労させてなぁ・・ は、そのおふくろにさん も前のことだが、おれ い出したぜ。もう二十年 てお寺に行ったことを思 き、おふくろに連れられ 「そりゃあそうだが、見

依然として坐っている。 づいたのである。和尚は とういう話が、一晩つ

特のこと」と尋ねた。こ が「いかなるか、これ奇 れはふるった質問だ。た この百丈に向ってある僧 うえらい坊さんがいた。 雄峯という山に百丈とい いていの連中は「いかな むかしむかし中国の大

す、大雄峯」と百丈が答えた。「独坐 れ奇特のこと」そうする そこで「いかなるか、こ るか仏法」などと馬鹿の るだけの力量があった。 が、この僧は趣向をかえ つおばえのように訊く わしがこの大雄峯にど

世界で最も奇特のことじ ゃ。百丈がこう言ったの っかと独坐しているのが

坐する姿も、そっくりそ だ。いま雲居大和尚の独 うのは 内容といい語句と いい、実に古今の名句 戴する一大古典である。 の日夜にお経のように頂 る。この書物は「宗門第 の禅の書物に見えてい 「独坐す、大雄峯」とい の書」といって、禅者 『碧巌録』という中国

居じゃが、それがどうし 三人を見て言った。

伊達政宗像 うか。今から頭をまるめ ろに逢えるでござんしよ て坊主になりましたら… うな悪党でも、あの世と い、あのう、おいらのよ りやしたので……。へ やらで亡くなったおふく て見ようということにな まの雲居和尚さまに聞い つ和尚さん……生き仏さ が、わかりませんで。 三人で話しあいやした

のはわけない。懺悔さえ「うむ、おふくろに逢う ならなくとも懺悔すれば すればよい。何も坊主に 一切我今皆戯悔と

いま、これを読むもの

のことが起ったのであ のまま百丈と同じだ。 そこでことに一大奇特

ろに這うようにして近づ が、明け方、おそるおそ 合っていた三人の山賊 いてきた。 る雲居の坐っているとこ ひそひそと夜通し話し

ござんせぬか。

おたずね あの名高い雲居さまで、 ちよいとお尋ねいたしや いたしやす」 仙台に行かれる途中じゃ ましたが、もしや和尚は す。さっき仙台からもら った……とお伺いいたし 「もしもし、和尚さん、

雲居はおもむろに山賊 「いかにもわたしは雲

「へい、それがその、

ぷんかんぷんで……へ しかし、おいらは、その 懺悔とやらの仕方もちん いうてのう」 『さようでござんすか。

の通り、たのみます」 弟子にしてください、こ い、いっそのことこの三 人をどうぞ和尚さんのお 「この通り、たのみま す

「この通り、たのみま

子どものように、額を地 三人が親の許しを請う 「妙なところで、妙な

と、阿逸多は弥勅のこ

釈迦文は釈迦牟尼のこ

すべき菩薩だ。だからわ と、弥勅は世の末に出現 滅生二仏の中間。是れ生 阿逸多に先んじて入滅。

釈迦文に後れて出世。

にあらず是れ滅にあら

に来い」 のむとあらば、わしは許 入門の仕方があるものじ 面にすりつけて頼んだ。 すぞ、わしについて仙台 ゃのう。いや、本気でた

の一隊がよれよれの黒衣 遠くまで出迎えた。先発 が着くというので、郊外 侯はいよいよ雲居大和尚 る仙台入りである。仙台 台に向った。意気揚々た せんで、和尚に従って仙 そこで三人は感涙にむ

た。 ての三人の弟子であっ 本当に雲居とそのなりた

話は今日まで、いや末代 た。この三人の仏弟子の して仏弟子となってい の山賊はあの夜、一夜に きわたった。そして三人 鐘鼓遠く桂島までとどろ 粛然としておこなわれ、 儀ととのい、僧堂の規矩 僧が大勢参じ、寺内の威 開堂するや、多くの修行 は松島の瑞巌寺に入ってさて、時到って、雲居 まで伝わるであろう。

川五右衛門の大百日鬘み いずれも芝居のときの石 荒くれ男がついていた。 本という乞食坊主に出逢 った。うしろには三人の をまとい、破れ笠に杖一

> 味を手向けるであろう。 て坐禅の威力に素直に興 は、禅智の徳を深く信じ

詮議してみたら、これぞ っている。といつらあや は道端の雑草のように茂 たいに髪はぼうぼう、髭 しいぞとばかり、捕えて

の辞世の偈にいわく、

大慈円満国師(雲居)

しは二人の中間で、減し 言えぬ、わしは生死の枠 の外の者じゃ。 たとも言えず生じたとも

大光明を放ちつづけて行 れてその奇特を現じ、 出現するまで、生死を離 いまも、また弥勒菩薩が すなわち雲居の坐禅は









修禅寺 807年に弘法大師によって開創され真言宗のお寺として栄え、その後鎌倉時代になり、 蘭渓道隆の入山によって臨済宗に改宗し、室町時代には北条早雲の招聘により曹洞宗に改宗し、長い時代を築いてきました。









指月殿 伊豆最古の木造建築と呼ばれる指月殿は、北条政子が 建立したものです。かつては菩提所として利用されていました。 幕府二代目将軍、源頼家のお墓もあります

柱川にかかる日本の情緒を感じさせる橋。都会の喧騒から離れた、落ち着いた時間を過ごすことができます。







 $F\ A\ X\ :\ 0558\text{--}72\text{--}2502$



独鈷の湯 修善寺温泉の発祥の湯です。弘法大師が独鈷 という仏具を石に打ち付けて湯を沸かせたといわれる 場所です。伊豆最古の温泉であり、修善寺のシンボル と言えます。

平成28年度 春彼岸合同供養会のご案内

陽光が春の息吹を感じさせる季節、 春彼岸合同供養会を下記日程にてご案内いたします。

毎回、10時の部・12時の部は大変混み合いますので、14時の部の参加をお願いいたします。 駐車場も50台と限りがありますので、なるべく電車・バスをご利用ください。 是非、みなさまお誘い合わせてお参りください。

同封の申込用紙にご記入の上、3月10日(木)までに郵送かFAXにてお願いいたします。 尚、御供養料 御塔婆料は当日受付いたします。

☆ 尚、ご不明な点や、お問い合わせは桃源院までお早めに連絡をお願いいたします。

2 0425−83−1133 FAX 0425−83−1134

3月 19日 (土)	10時の部	12時の部	14時の部
3月 20日 (日)	10時の部	12時の部	14時の部

塔婆料 一本 二千	円

- □ 桃源院駐車場は満車が予想されます。当日は各開式30分前から豊田駅北口より送迎バスを運行いたします。どうぞご利用下さい。
- □ 法話・御詠歌・簡単なお食事・お抹茶・お菓子の接待もございますので、お誘い合わせの上お参りください。
- □『欠席供養』

当日欠席にての供養をご希望される方は、申し込み用紙に [欠席] とご記入のうえお申し込み下さい。

(`一´〃) ドヤッ[

<日本にある「世界一」水道>

江戸時代、江戸の水道は規模世界一であった。水道の起源は、天正18 (1590) 年、徳川家康が江戸に入り、家臣大久保藤五郎に命じてつくらせた小石川上水(後の神田上水)であり、その後、江戸の発展により、玉川上水 (1648)、青山上水、三田 上水、亀有上水、千川上水など6つの上水がつくられた。

当時、江戸の人口は100万人を超えていた(世界一の人口)が、下町は上水が行き渡り、山の手は一部で利用され、江戸の人口の六割に水道が普及していた。

江戸6つの上水の総延長は150キロに及んだといわれ、給水人口、その規模は世界一であった。17世紀のロンドン、パリの人口は40から50万人程度だった。

パリは近隣の泉水を導水し、市内に流れるセーヌ川の水を風車で揚水していた。 ロンドンでは、30キロ離れた泉水を導水する水路(総延長60キロ)があった。ロン ドンでは配水本管は地上に露出していたが、江戸の町中では大部分が地下に木管 (樋・枡)を埋設されていた。

江戸の樋・枡には地形や水勢によって、埋枡(地下)、高枡・出枡(地上)、水 見枡(蓋があり、水の質(清濁)と量(増減)を検査)、分岐枡、溜枡などがあっ た。 完成後の玉川上水系は江戸城内をはじめ四谷、麹町、赤坂の高台や 京橋方面を給水し、総延長85キロだった。



水質・水量管理もされており、水番人が見回り塵芥を除去し水質を保全**昔の玉川上水** し、水量の調節も行っていた。

取水口の番人は上流が豪雨の時は水門を閉じ、濁り水を川に還流し、逆に日照り続きで渇水時は給水制限をしていた。当時、これほどの規模の飲用水専用の人工的水路は江戸の外に世界のどこにも見あたらなかった。